

---

# **黒い会長とモヤシな俺の４９８日**

藤森みりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒い会長とモヤシな俺の498日

### 【Zコード】

Z0541Y

### 【作者名】

藤森みりあ

### 【あらすじ】

俺、万々原悠暉ままでらはるきは、校内でも有名なパシリ！  
いつものように不良にパシられてコンビニへ行くと……、  
そこには、次期生徒会長、神御藏紅科かみくらべくしながいて、彼女のとんでもない姿をしてしまった。  
彼女もまた、俺の犯した罪を知つていて……。

秘密から始まる、不器用な一人の恋のはなし。

## 第一話 黒ご会食と反面（前編）

お初でじょひか (\*^-^\*)

違つ小説と同時進行で書き始めました。

どちらかといつと更新はスローペースだと思いますが、

どうぞよろしくお願ひ致します。――――

## 第1話 黒い会長と仮面

時は初秋。

この時期と言えば……大変忙しい。

普通思い浮かべる事と言えば……、

文化祭？

体育祭？

テスト？

……いやいや。

それだけではないだろ？

まだ残っている。

とっても大事な学校の威信をかけたあの行事が！――！

そう、それは……。

新生徒会役員選挙および立会演説会だ――！

今年の会長有力候補は女子生徒。

しかもトンデモ美少女である。

彼女は

2年6組 神御藏 紅科  
かみくら くしな

一大企業、『神御藏カンパニー』の一人娘、いわゆる大富豪というやつだ。

そのうえ成績優秀で、運動神経も抜群にいい。柔道ではインターハイ出場経験もあるらしい。

そんな何でもかんでもするりとこなしてしまつ彼女は、勿論のこと学校のアイドルである。

そしてまた、生徒会長という立場を持つたらその人気も爆発的なものになるだろう。

俺も彼女の魅力に心奪われ、特別な感情を抱いていた一人だということは言うまでもない。

まあ、そんなことは『今までの』彼女について述べたことだ。ということは、今現在はどうなのだろうか……？

疑問は次から次へと浮かび上がる。

気になるか？

……では、語らおうではないか！  
化けの剥がれた彼女の本性を…！

事の起こりは2週間前。

実は俺……、万々原まよはら 悠暉はるきは校内でも有名なパシリであった。

今日は何と、とんでもない命令を空き教室にて命じられていた。

「よう、ハルキー。俺え、喉渴いたやつたあ～。今から15分以内にコンビニからジュース買つてきてー」

別にもう学校は終わつていて、昼休みなどでもないから制限時間なんて設けなくともいいはずなのだが、俺が息を切らして走つてくる無様な様をコケにしたいのだろう。

教師も手を焼いている斎木さいきという不良にいつも絡まれる俺。なーんにもやつてないのにかまわれる俺つてば、超かわいそうー。

そんなことを表情にはおへびにも出でずに被害者面して、我ながら細いと思ひ手を斎木へと差し出した。

「んー？ なにせつてんのー？」

もともと不細工な顔をこれでもかと重ねてわざといじつて俺に問つた。

そんな斎木に苛つきながらもパシリリはパシリリして従順に答えて見せた。

「あの……、お金をいただかないと……。」

すると、田の前にあつた斎木の顔が、横に揺れて姿を消した。

…………と思つた瞬間！

バキッ！

鈍い音が体中を貫いた。

……いや、激しい痛みが、の間違いだ。

「…………、……」

斎木の堅く握りしめられた拳が、俺の鎖骨辺りにめり込んで吹っ飛んだ。

「調子にのつてんじゃねーぞ、あん？ ロラ。そんぐらい、てめえの金使えばいいだろーが。」

微かに鉄の味がする。

恐らく殴られた際に口の中を噛んでしまったんだろう。

口角の上がった不気味な笑顔は、斎木が放った言葉よりも俺に鳥肌を立たせた。

「でも……、財布なんて、持ってきてませんし……。」

『不機嫌を煽る』と校内の不良から好評の困ったように笑う『哀愁スマイル』を斎木に見せると。

「そんな顔しても、ビートにもならねえだろーがよお？ ええ？ ……ま、丁度いい。最近つまらねえと思つてたところだつたんだ。」

何もかも放り投げたかのような仕草をする斎木。

「これはもしゃ……？」

俺の苦悩の日々もついに幕を閉じるのか……。

勝手に思考を巡らせ、心躍らせる俺に『衝撃』といふ名の爆弾が降つてきた。

「ま・ん・び・き…………してこい。」

血走った田をした斎木にワナワナと震えあがり、動くこともできず  
にじむと、

「もたもたしてつと、田ン玉えぐり出すぞコト」

ドスのきいた声で脅された。

この状態の斎木に言い返したら半殺しは確実……。

そう悟つた俺は、真っ青な顔で教室を出てコンビニへ駆けだした。

走っている途中に思つた。

半殺しではなくて、八分の七殺しくらいかなあ……、なんて。

学校から一番近いコンビニに着いたのは5分後。  
これなら何とか間に合ひ……。

だけど、万引き、か……。

人通りの多い割には空いている店内を見回して、誰も見ていないこと。カメラの死角であることを確認し、一本のジュースを手に取る。それを、ダボツとしたパークーに忍ばせ、漫画のコーナーに寄り、立ち読みする振りをしてから店を出た。

すいません、すいません……！

何度も何度も心の中で謝つた。

表しきれない罪悪感をまといながら視界に入ってきた光景は……、

「あやあー、やめてください……！」

三人の男と、一人の女。

女の周りを、男たちが取り囲んでいる。  
どうやらナンパらしい。

そして、取り囲まれている女、その人が神御藏 紅科であった。

まあ、あれだけ可愛ければ、そういうこともしようぢゅうあるんだ  
らうなあ……。

喧嘩は弱く、割って入る気も更々ない俺は、せりに罪悪感を積もら  
せながらもただ眺めることしか出来なかつた。

それに、時間が迫つて来ている。

悪いけど、俺にも俺の人生があるんだ……、「ゴメン……！」

ぐるりと身を翻し、足を一步前に踏み出したその時だつた。

「聞こえねーのか……？ やめろっつってんだろ……！」

数人の呻き声、暴力を加えられた音。

ま、まさか……！？

そんな……！ 女子に手を加えるなんて非道なことしたんじゃ……！

「神御藏さん……！？」

先ほどやりとりが行われていた場所には、男の姿は消えていた。  
と、いうよ。

地面に突つ伏していた。

そして、その中心に立つて、制服の裾を直し、汚れた箇所をパンパ  
ンと払つていたのが、神御藏だった。

「 「……………」 」

なぜ神御藏さんが…………？

田を白黒させてこる俺ではあつたが、恐い／＼れば、彼女がした行為なのだら／＼。

そして多分、やつもの暴力的な発言も……。

また、神御藏は、俺に田を向け……、とこゝよりは俺の制服を見て田を見開き、顔面蒼白にしていた。

恐らく、自分が校内（といふか、校外でもだけど）どれだけ有名なのかを自覚しているのであら／＼。

もしかして俺……、見ちゃいけないもの見た……！？

出来るだけ自然に方向転換をして、早歩きでその場を去った。

「ちよつと待つてください……！」

遠くから神御藏の声が聞こえた。

いやいや、待つわけにはいかないでしょ！

少しだけ自信のある足で、学校まで走つて戻つた。  
ど／＼や／＼、こゝまではつこつこわなかつたらしい。

一安心して、ホッと息を漏らす。

これが、俺と仮面をつけない会長……、黒い会長ひでも呼せつか。

その、運命が初めて重なった瞬間であった。

## 第1話 黒い会長と反面（後書き）

拙い文面ですが、温かく見守ってくれば幸いです

## 第2話 黒い会長と秘密の契約（前編）

男性を書くのは難しいですね……。

頑張りますーー！

## 第2話 黒い会長と秘密の契約

舞台は次いで、空き教室。

「おつせ——んだよ……」

憤怒を露わにした斎木が、俺に土下座をつかせ、息巻いていた。

「すいませんでした……」

頬を床に押し付けられ、必死に謝る。

「ああん……？ そんなんで足りると思つてんのかよ、『…………』

言いかけた斎木がハツと口をつぐむ。  
何故なら……

「な……に、やつてるの……？」

教室の入り口に人が立っていたからだ。  
それは……、

「紅科チャン……ー？」

だらしなく口元を緩ませる斎木。

いや、そこは驚くところじゃないのか？

……まあどうやら暴君でも、人並みの感情はあるらしい。

つて、そんな場合ではなくて……。

神御藏だ！

「や、斎木くん……？ 何やつてるの……？」

眉根を寄せ、怪訝そうに神御藏が言いつ。やはり、さつき見た光景は幻であったのであらうか。だつて神御藏は、そんな娘じゃねーもん！！

「違ひつ！ ちげーよ！？ 紅科チャン！」

「何が違ひの！？ 斎木くん、そんな人だと思わなかつたよー！」

スラスラと嘘を並び立てた斎木に、なんと神御藏は涙を流して非難する。しゃくり上げる神御藏に、ついに折れたらしい斎木は一つ息を漏らし、

「…………めん、紅科チャン…………。もう、こんな事しねーよ」

不細工な顔を赤らめて、頭を搔きながら謝る斎木。

「ホント？ 約束だよ……？ あたし、もう生徒会長なんだから。これからはあたしが許さないよ……？」

モジモジしながら、上目遣いで斎木を見つめて言葉を紡ぐ。

「ああ。もう万々原にパシリなんてやうせねーし、ボコッたりもし  
ねー」

「うえつ！」

お二お二マジかよーーーー

こりやあタナボタだ。

。 素木も、神御藏に言ったんだ。まさか破るなんてしねーだろうし……

「絶対だよ？」  
「からね！！」

万々原くんに何かしたら、斎木くん退学にしちゃう

かつ、神御藏……！

俺、お前のこと大好きだぜ……！」

「お、お」

斎木もタジタジしながら頷く。

ヤマトノミコト

備の階の田父も幕を閉じたんだ……！

それは、俺の貧相な『哀愁スマイル』とは全然違う、極上の感涙しておせひそはなかだ俺は、禍徳庵が微笑みかけた

卷之三

「じゃあ、その……俺、用があるからよ、行くなー。」

神御藏の『惱殺スマイル』を浴びて、ヘニヤヘニヤの斎木は口元をほころばせながら教室を出て行つた。

まあ、とにかくにも俺のパシリ生活が終わつたんだ！  
今日は、プレミアムプリンで乾杯だな。

くるりと振り返った次の瞬間、

「神御藏さんっ！ ありが……と……？」

ガタツ！！

目の前に神御藏の顔があつて、壁に押し付けられていた。

.....

漫画とかでこのシカを見たことある? など  
役回り返しやね?

かかかかか  
神御戻さん……！？

せへえ、俺、動搖しますて震えでるし。

「万々原くん……、やつを『ハビ』であたしの『じ』見てたよね……？」

うわあー！

卷之三

超可憐ニヤ、可憐ナシノナニ

「へうん」

神御藏の声なんか耳に届かなくて、曖昧な事を言つてしまつた。  
や、照れてただけだけども！

「やつぱ、そりなんだあ？」

さつきとは打つて変わつて妖艶な声が放たれた。

え  
?

自分の耳を疑つたが、どうやら誤りではないらしい。  
神御藏に目を向け、確かめようとした途端……、

「んん……！」

唇を押し付けられた。

力はともかく強くなっている

てゆうか、女の力に敵わない俺って……。モヤシすぎるわ！――

神御藏は、ついばみながら何度も角度を変えて俺の唇を吸い取る。ちょっとだけいいなあとか思つてしまつたり……。

いけねー いけねー ! !

残り少ない……というかもともとあんまり無い理性で神御藏の足を踏んづけた。

「つた……！」

神御藏は、つぶらな大きな瞳を潤ませながら

と怒鳴つた。

いやそれ俺の台詞——！

清純なイメージの神御藏からそんな清楚さの欠片もない言葉が飛び出したのに驚愕した。

「や、やつぱりちのコングーの女って、神御藏だったんだ……。」

もつ、『さん』をつけるのも忘れていた。

つていうことは……、何、ここに、裏表あるつてこと！？  
じょじょじょ冗談じやねーよ！—

俺のオアシスが……！

「つづーか、なんで俺にキス！？　どうかしてんじゃねーの！？」

「キスは、罷だよ？　あんたを落とすためのね

間髪入れずに神御藏は、悪そりに片口をあげて笑った。  
あんなに激しかったのに、息一つ乱さなことじりを見ると、ここに、  
相当やり慣れている……—

俺の初チューがあああ！—！

「これ

神御藏がスッと取り出したのは、わざわざコングーで俺が盗つたジュー  
ースだった！

「あんた、やつき万引きしてたよね？　そのパークーに入つてたし、  
盗つてるとこ見てたし。」

鏡を見なくとも、顔が引きつっているのが分かる。

「ここのとばりして欲しくなかつたら、あたしのことも黙つててよ  
ね」

鋭い光を宿したその目には、もはや優しさなど欠片も残っていなかつた。

「でも、万が一のこと考えて、あんた、いつもあたしの傍に居ること。」

そして、質の悪いあの笑みを浮かべた。

「分かったわよね？　これは契約だから。……破つたら、どうなるか。」

そこまでも言つてから耳元に自分の口を近づける。

「考えておくことね

勝手にしゃべつて

勝手に出て行つてしまつた。

……と思ひきや。

「やうやう……あたしのことは紅科つて呼んでね。いつも傍にいるのに、名前じゃないなんておかしいでしょう、悠暉？」

ニヤリと笑つて神御藏……、いや、紅科は教室から出て行つた。

そんなこんなで俺と紅科の契約が済ませられて、波乱の日々が幕を開ける。

## 第2話 黒い会長と秘密の契約（後編）

ほんとうにいろいろまでを  
1話にいたかつたんですねううう……（^-^）

### 第3話 黒い会長とクラスメート（前書き）

今回、~~気~~つけました。  
一応毎日ちょくちょく書いてますが、  
更新ペースは週1辺りになりそうですが（—）

## 第3話 黒い会長とクラスメート

「悠暉ー！ あたし今日、生徒会で遅れるから待つてくれる？」

俺のクラス、2-5は、紅科の隣のクラス。

教室の入り口からひょっこり顔を出して、ニッコリ微笑む彼女。

そんな季節だ。

「分かった。何時くらいまでかかる?」

振り返り、温和な目で彼女を見つめる。

「うーん……。そうだなあ……、一応5時半くらいには終わると思  
うけど……。あつ！ あたし、悠暉に、その……、話したい事が、  
あつ、て……」

恥ずかしいのか、耳まで赤らめてモジモジと語尾を小さくする紅科に……、いや、俺にだろうか。いや完全に俺だな、うん。そう、俺にヒューヒューと冷やかしが飛ぶ。

「告白か――?  
ン――?」

「ついに悠暉も春かー？」

「おこおこー、瞬く間にあらわす。」

「紅科チャーナン！ 超カワイイ————！」

年中脳内お花畠の奴らは、  
どうにでも居るものなのだらうか。  
呆れてしまう。

だが、同時に助かっていたのもまた事実である。

前に、斎木が紅科に誓つた事があつたのを覚えているだらうか。その時を境に俺へのパシリの扱いは殆ど過去の産物になつていた。

「じゃあ、俺口上で待つてるから。仕事、頑張つて来いよー」

そう言つた瞬間、口笛やら野次やらがピークに達した。こんなに離されても俺たちの間には何もないのに。

……そう、俺たちがこんな風に会話してるのは虚偽なのである。では何故こんな会話をしているのか……。

それは、秘密裏に契約を交わしたからである、彼女と。

実は、俺は彼女のとんでもない姿を田の当たりにして、また彼女も俺の犯した罪を知ってしまった。

そのことは、彼女にとつて傷になる出来事であり、

俺にとつて傷になる出来事であり……。

だから、俺たちの事が他に漏れないようにと契約をしたのだ。

「悠暉？」

不意に、紅科がまた俺のことを呼んだ。

「ん？ 何……」

ふわりと、彼女の色素の薄い髪の毛がなびいた。  
そして俺の視界を遮る。

「ちやんと、待つてね……？」

紅科は、紅潮した頬に片手を添え、恥ずかしそうに俯きながら囁いた。

「わ、かってる……よ」

思わず見とれてしまった。

彼女の美貌は、もう飽きるほど見ていた……、はずなのだが。どうやら『飽きた』なんて、永遠に無いみたいだ。

そして、そのまま俺に顔を近づけてきて言った。  
誰にも聞き取れない程、小さな声で……。

「何？ あたしに惚れた？ 顔真っ赤だけど」

そうして、誰も見ていないことを知つてか知らずかほくそ笑んだ。

「あ？ んなワケねーだろーが」

まあ、小さい声ではあるが言い返した。

この女は、空氣というものが読めないのでどうか。

「氣イ、つけろよ。その口の利き方。」

女らしからぬその口調！――

いつもの優しい神御藏さんはいづこへ――??

俺も彼女も同じ立場のはずなのに、何とも彼女の方が有利なような状況になる。

いつも。

「知つてゐるつづーの……」

結局折れた俺が、溜め息混じりに吐くと。  
納得したように笑みをこぼして。

「じゃあ、ね。悠暉……」

熱っぽい田で俺のことを見つめてから紅科は教室を後にして。  
いやあ、感心します！  
あんたすげーよ！  
それで何年嘘つき通してんだよ！  
もう神だよーーー！

俺は、紅科を見送つてから、また溜め息を吐いた。

しばらく経つた。

俺は、特に何もすることが無かつたため、ボーッとしてた。

ふと、周りを見渡すともう、誰も居なかつた。

カーテンが風になびいて揺れる。  
すると、好いにおいが鼻腔をつく。

振り返るとそこには……

「明日葉さん……」

言葉が自然に口からこぼれた。

「うん。 祭でいーよ。みんなそう呼ぶ

そう言つてニーッコリ笑みを浮かべた。  
彼女は、俺のクラスメートの明日葉 祭。  
いつも憂いを含んだ瞳で、少し話しかけにくらいイメージがあつたんだが、向こうから話しかけてくれるとは……。

「どうしたの？ 委員会？」

本当に意図が掴めなかつた俺は、彼女に問うた。  
少々不躾だつたかもしない。

まあでも確かに、俺と祭は同じ委員会で。

「うん、違うよ。ただ、ちょっと万々原くんに、聞きたい事があつて、ね」

気のせいいか？

少し、顔が赤いような……。

「え……、何……い、い、委員会じゃねーの？」

一応。いやホントに一応。

祭ちゃんは美少女。

実際話したことはあまり無いが、  
委員会が一緒……、といつのこと。  
珍しい名前……、といつのこと。

カワイイな……、つていうので覚えてた。

いやー、いやいやいや、別に不純とかではねーって……！  
ちょっと声上擦つただけだつて……！

「その……、わざと、神御藏さんと親しげなとに見たから……。仲、  
いいのかなあ……つて」

んんー？

何コレ!? 篠、ヤキモチでもやかれてんの??

対して喋つたことねーナビコレ、脈アリつてやつか……?

……嫉妬つてヤツなのかコレは…??

「や、その……。なんていうか。仲がいいまではこかねーよ?」

ちよつと期待して言つてみた。

「そりなの? 名前で呼び合つて、前髪をかき上げた。  
のかなあ……つて、思つて……」

そつ照れくわいに言つて、前髪をかき上げた。  
仕草まで可憐すきらんよ、祭りやん!!

「何? 何でそんなこと聞いたの?」

つて、赤い顔の祭ちゃんに笑い混じりに言つたら、

「万々原くん、のこと……、気になつて……」

顔が引きつるのが分かる。

まさか俺……、紅科のこと好きとか思われる?  
思われてるのか??

「あ、のオ……。俺、別に紅科のこと好きってワケじゅねーよ……?」

あり得ない!!

断じてそれだけはあり得ない!!!!

すると祭ちゃんは、薄く涙の膜をはらんだ田で息をついた。

「そり……な、の……? よかったあー……」

「え?  
何が?」

急に泣かれるかと思つた……。

だが、この後本当に泣きたくなるのは俺の方。

「あたし、万々原くんのこと」

そこまで言つて、急にカーラーと/or/いう異常に顔を赤くする。

さすがにここまで来たら分かつてしまつ。

脈アリのレベルでは……、ねーよな……。

でも俺、そんな喋った記憶無いんだけど……。

「その……、万々原くんが……、あたし、」

やばい、やばい!!!!

俺までつられて真っ赤だけど……。

と、『ハロ』。

「はーるきーーーーー 生徒会終わったあーーーー。」

と教室にスキップしながら入ってきた女が一名。先ほど紹介した、空気の読めない女である。

「紅科」

「神御藏さん……」

お願いだから、場の空気感じ取つて！！

「あ、祭ちゃん。何かあったの？」

と、祭に向かってニッコリ微笑む。  
どうやら『凶殺スマイル』は、同性に対しては発動しないらしい。  
便利な機能だなおい。

「ひひん、何もないよ。」

遠慮がちに微笑むと、なんと！  
教室を出て行つてしまつた…………！

廊下にパタパタと小気味よい足音が響いていた。

「おい、紅科！ てめえ…………！」

初・告白を邪魔されて涙ぐむ俺。

「何？」

対して紅科は、興味もなさそうに素つ氣なく返す。

「せりてー許されえーーー！」

紅科の態度にも、自分の行動にも腹が立つていた。

「は？ ちょっと……どこ行くのーーー！」

後ろから紅科の声がぶつかってくる。

「祭りやん！」

振り向かずに、走りながら叫び返す。

そして、無我夢中になりながら彼女を追いかけていた。

### 第3話 黒い会長とクラスメート（後書き）

中途半端ですいません（――）

ただ、長くなりすぎてしまつたもので……。

## 第4話 黒い会議室の一周間（前書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ありませんでした。お詫びして  
待つていてくださいました皆さん、  
本当にありがとうございました。（\*^-^-\*）

## 第4話 黒い会長と紅い彼の一週間

酸素を必死に取り込むうとし、肩で息をする。額には僅かに汗が滲み、体も若干熱を保っていた。

かなりの距離を全速力で走ってきた。

一人の女の子の背中を追つて。

だが、来た道が悪かつたのだろうか、彼女が早すぎたのであらうか……。

その姿を再び見ることは出来ずに終わった。

俺も決して足が遅いわけではない。

といふことは恐らく、前者で間違いないだらう。

「祭ちゃん……」

喘ぎながら、しかしあはつきりと名前を呼ぶ。

だが、周りに誰もいないこの場所ではそれは虚しく、地に吸い込まれていくのだった。

「悠暉ー！」

ふと遠くから紅科の声が聞こえた。

無意識に振り返つて見れば、髪の毛を振り乱し、息を荒げながら走つてくる姿が小さく見えた。

やがて紅科は俺のもとへ駆け寄り、ホウと息を吐いた。

「悠暉、その……」め……

珍しきどもつて喋る紅科。

だが今はそんなので冷やかす気分にもなれなかつた。

ぐるつ、身を翻して歩く俺に、尚も語りかける紅科。

「悠暉！ 本当にあたしが悪かったと思つ。知つてたよ、告白だろうなつて…」

冷静でいられない。  
頭にカツと血が上る。

何で、見当ついてたのに邪魔したんだよ…！  
紅科の手が伸びる。

「さわんなーー！」

ビクッと体を強張らせる。

ちらりと田に入つた、紅科の表情が…、  
とても怯えたようなその顔が、何とも俺の苛立ちを倍増させる。

「ふざけんな、てめえ…！ 知つてたんだつたら入つてくんじゃねえ  
！…！」

少しだけ触れた紅科の指先をちぎれんばかりに振り払つ。

「ひ……！」

小さく漏らしたその声が聞こえなかつた訳では無かつたが、足早に  
その場を去つた。

その時、紅科の大きな瞳から涙が零れたのを。  
もちろん俺は、そんなこと知る由もなかつた。

「悠暉ー！ テスト結果張り出されてる、見に来いよー。」

紅科と口をきかなくなつてから2週間が過ぎた。

パシリから解放された俺は、少しづつではあるが、周りに人が出来はじめていた。

紅科の影響も大きかつただろう。

そこまで考えが至つたところで、紅科が思わず思考に入ってきたことに苦笑が漏れる。

「なあ、悠暉つてばーー」

「おー、今行くー」

1	姫澤 咲	486点
2	神御藏 紅科	478点

: : :

「…………は？」

「紅科チヤン、一番じゃない…………」

見れば、周囲も少なからずざわついている。

さらに見渡してみても、紅科の姿は見当たらなかつた。

いつもならぶつちぎりで500近く獲る紅科が478点つて…………。

や、まあ十分にすごいけど……。

結構真剣に考え方で耽っていたのだが、隣ではみんな呑氣にもう違つことを語り出している。

「てか、この姫澤チャン? 咲チャン? すげえ――!! そして

「あー、俺も思つた！ セツで一可愛いよなア、逢いたい！」

いや名前かよ!

会つたことねーのかよ！――

どんな娘かと思つたわ！

「なあ、悠暉ー

「ん？」俺はいかがわしいことは考えてません！」

「あ？ 何言つちゃつてんの、お前突然。……いかがわしいこと考  
えてたんだ？」

「考えてねーつて！」

突つかかってきたのは、最近よくつるむ我妻あがつま 恭慈きょうじ くだらない言い合いが揉め事に発展してしまった。どうせ小突き合いで終わるのだろうと思っていたのだが、我妻から予想外な言葉が飛び出た。

「じゃあ、紅科チャンの『ト』でも考えてたのか？？」

途端、準備していた言葉を飲み込む。目が見開かれるのが自分でも分かる。

同時に自分の単純さに腹が立つ。

「やつぱりな

「は？ 何で俺が紅科のことなんか考えなきゃいけねーんだよ」

咄嗟に口を突いて出た言葉は、小学生の語るそれよりも幼く感じた。少々上擦った声が、よつよどもらしさを演出していた。

「だつてお前、氣づいてないかもだけどよ、いつでも紅科チャンのこと探してみやせっ？」

そして、耳元でぼそりと呟いた。

「2週間前から……な

そして、俺の顔を覗き込み、ニヤリと笑つ。

そして徐に口を開き、ポンと背中に手を置いた。

「俺、こんな時の為に紅科チャンの居る場所、リサーチしとから行つてくれば？」

ゆつくりと我妻を振り返れば口元に弧を描き、優しい微笑を浮かべていた。

長い付き合いでもないのに、じこまでしてくれたヤツって、正直あんまりいない。

素直に良い奴……と感動していれば。

「つづー」とで？ 悠暉に協力したから、俺にも協力してね

やつぱり世の中そう簡単にはまわらないらしい。  
とはいっても、協力してやらないのも酷だろ？。

「何？」

「あれ。……姫澤咲ちゃん。どんな子か探しといて～」

そう、息巻くと。

風のように行つていった。

恥ずかしかったのか？

いや、まさか（笑）

まあ、とにかく俺は、紅科の元へと歩を進めた。

「紅科」

普段出入りなんか殆ど無い図書室。

最近はここに入り浸っていたと、我妻から聞いた。

ふわり…、

色素の薄い髪の毛が窓から漏れる太陽の光に反射して、眩しかった。

紅科は、俺を見るとギョッと顔を強張らせ、開いていた参考書の山

をもの凄いスピードで片付け始めた。

「紅科」

もう一度、呼んでみる。

でも、紅科はもう振り向きもせず、片付けも終わってしまった。そして、足早に俺の側を通り過ぎ、図書室から出て行ってしまった。人気のない廊下に、軽快な紅科の足音が木霊する。

ただ呆然と立ち尽くしていただけの俺だったが、自然と体が図書室の外に向く。

次の時には、もう走り出していた。

「なあ！ 紅科つてば…！ 待てよ…！」

かろうじて見えていた彼女の背中はいつしか見えなくなっていた。

そろそろ、帰ったか…。

自分の中でも蹴りをつけ、諦めかけたとき。

幾度も角を曲がり、窓の外を見遣ると、そこには縮こまつた紅科が見えた。

でもそこは、反対の校舎だから、行くのに時間がかかる。

また見つかったら厄介…、そう億劫になつていた俺は、その場所の死角になる場所を選んで彼女に近づいていった。

5分後、やっと着いたそこは駐輪場の傍だつた。

憂鬱に包まれた紅科を見ていて、俺がそんな顔をさせているのかと、落ち着かなくなつた。

すると、風に揺れた、彼女の色素の薄い髪の毛が俺の頬を撫でた。いつの間にか、それほど近くに来てしまつていたのだ。

案の定、振り向いた紅科。

あの心地よい感触が離れていく……。  
紅科が、俺から離れてく……。

何故かそんな考えが頭をよぎって、その場から立ちかけた紅科の肩を、思わず抱きしめていた。

「うー?」

小さく、声をあげた紅科。  
久しぶりに……、

2週間ぶりに聞けた紅科の声。

びつしそつもなく嬉しくて……。

肩にまわる自分の手に、より力を込め、再びギュ、と抱きしめる。

「紅科……、もひょひょつただけ」

紅科からやめさせない息が漏れる。

ほぼ無意識で、紅科に手を伸ばした。

きっと、この時から……。

とつぶて心は動き出していたんだ。

## 第4話 黒い会長と空っぽの一週間（後書き）

急展開でした、

今まで更新が無かった分

一番私が焦っているのかもしれません( ^\_\_\_^ ; )

本当に

申し訳ありませんでした。○○

## 第5話 黒い会長と仲直り（前書き）

前半は微シリアスです。

後半は……、いつものテンポですかね（^—^；）

## 第5話 黒い会長と仲直り

トク、トク、トク、トク……

俺と紅科の鼓動が重なって、気持ち良いリズムを刻んでいる。そつと瞼を伏せ、響くその音に耳を傾ける。

速くなりつつある鼓動を、自分だけのものにしたくてもう一度、強く腕に引き込んだ。

小さく聞こえた声に、聞こえなかつた振りをして。

だが。

そんな時間は一瞬のうちに粉々になつた。

紅科を抱き寄せた時には、もう欠片も残つていなかつた理性が、チャイムによつて無理矢理引き戻されたのだ。  
それは紅科も同じだつたらしく。

バツと、俺たちの体は電光石火で離れた。

そして勢いよく振り返つた紅科の長い髪の毛が俺の頬にバチンと当たつて、

「でつ……」

平手打ちされた気分になつた。

「うわあ！ ゴメン悠暉！ 超痛かつたよねー！」

そう言つて、再び俺に触れる紅科。

まあ、当然の如く顔は近づく訳で。

この場合、俺は不可抗力。  
断じて不可抗力。

だから、顔が赤くなつても仕方ない。

つつつとも、俺は紅科の髪の毛打ち食らつてたから別に不思議では無いんだけど……。

だからといって、紅科の頬が真っ赤になるのを近くで見て、平氣でいられる訳もない。

「つー」

たぶんむづ、俺の顔もゆでだこ状態。

髪の毛で赤くなつたといつには、不自然なくらい赤いだろ？。

……とまあ、そんなこんなで場の空氣は和み。

何となく、俺と紅科は仲直り出来たみたいだった。

だけど、俺は何となくで済ませるのがイヤだったから、謝つた。

「紅科……、あの、や…。俺も言ひ過ぎたとこあつたから…、その、ゴメン…」

ちよつと言ひ訳みたいになつてしまつたけど、伝えたかったことは伝えられた。

「うん、あたしが悪かったわけだし。……ゴメンね」

改まつて謝りまくる俺たちは、きっと端から見たら変人同士。  
だけど、そんなこと今は微塵も興味ない。

どちらともなく笑みがこぼれる。

その和んだ空気が何にも変えがたく心地よかつた。

紅科と居てこんな気持ちになるなんて思つても見なかつた。

俺の前では、靠つたのは懲りつてゐるだけだ。何うのが

しおりしわを…、感じてしまつたからだろうか。

“女子”って感じ？

待て、待つんだ悠暉！！

おー！ リセクト完了了！

何なんだ、この、“意識しちやつてるな俺……”。な流れ！？

心中でシャウトしまくる俺に、紅科が声を掛けた。

「ねえ悠暉」

ケンカの仲直りがたつた今だつたからだろつ、微妙に氣まずさが残る声色で遠慮がちに言葉が紡がれた。

「あ？」

だが俺は、自分の反応にも

紅科のしおらしさにも

びつじよつもなく腹が立つていて、きつと声を掛けるのにももの凄く勇気が必要だつただろつ紅科に怒りをぶつけてしまった。

「！？ 何なのよそれ！ あたしが声かけてやつたつてゆーのに…！ ……このつ、悠暉」ときが…」

どうやら俺は、人を苛つかせる方能を持つていらしー。

厄介なスキルだ。

紅科を煽つてしまつたようである。

……でも、た…。

ちよつと言ひ過ぎじゃね？

リアルに傷ついた。ナニ“悠暉”とき”つて？

反発しよつとして発し掛けた声が喉の奥で消える。  
そんな様子を見て焦つた紅科が、慌てて否定する。

「つていづのはウソだよ！ 悪かつたわね！ ……ちょ、何田え潤  
ませてんのよ、ホントなよつちいわね！」

そしてまた、あ、コレもウソよバー！ と直す。

本当にこいつは、人をけなしてんのか、素直になれないのか……。  
でも、こんな紅科見れるのは俺だけなんだよな……。

人は知らない紅科の本当の姿を、俺だけが知つてると考えると、誰に対しても分からぬ優越感が生まれて、勝ち誇つた気分になつた。

「な、紅科…。なんか奢つてやるよ

不意に口を突いて出たその言葉に、紅科が元々大きな田をさらに大きくしている。

そりや そうだね!。

前まで俺は、パシリ生活一筋だったから金欠が当たり前の状況だった。

それが今は、奢ってやれるほど懐の大きな男にまで成長したのだ。紅科が俺の成長に感動しているのも頷け……

「なんだその上から目線!! あんた勘違いしてるー?」

いやそっちかい!!

俺の大人の階段んん!!

もはやスルーの域を超えてますよ紅科さん。

俺、何気に結構HP削られてるからねー?!

「あ、わり……じゃあ、その、俺……、帰るわ

そんな、迷惑掛けて喜ぶヤツじゃねーし……、とその場を立ち去りかけたら。

「はあ? なんか奢りたいんでしょ? 付き合つてあげるわよ、しょーがないからー!」

俺は、今更ながらやつといいつの性格を理解した。

そう、多分こいつ……、俗に言つ“シンデレ”つてヤツだ。

そして、その方程式も完璧。

『紅科（素直じやないヤツ）＝シンデレ』

出来た！－

「で？？」

「は？」

互いに疑問をぶつけ合つ俺たち。  
てか、俺がやつすに考え方してたから聞いてなかつただけかもしれ  
ないけど。

「ビートで連れてつてくれるの？」

心なしか、紅糸の口の端が微妙に上がつてゐる気がする。  
ぜつて一俺のことなめてる！

（こうなつたら、もうプライドが許せないぜ！（俺にもプライドは  
あります）

ちょっと高めの店だがしようがない。連れてつてやるーじやあない  
か！！

「……駅の近くで出来た、あの『アリス』でビートだ

「ふーん。ま、いんじゃない？ お金は足りるのか知らないけど」

クッソ、語尾にハート付くような喋り方しがつて。  
意地でも間に合わせてやる。

「で？？」

「は？ またかよ」

内心、面倒くせーと思こながら聞いかけぬと、

「だーかーりー！ ビーハツて行くのかつて聞いてんのよー。」

「は？ お前ん家迎えに来るんじゃねーの？ あのでっカーリムジン」

「バカじやないのー もつ売下過ぎたからヒツヒツ帰つたわよー！」

「で、電話掛ければいいじゃん」

「こつも勝手に来るから、電話番号なんて知らないわよー。」

「いやせこせき乗つてすんなやあーー ビーすこのお前、俺ついで乗つてこいつと画策してたんだけビー？」

「だから知らないわよー そもそもあんたのせいであたしまで遅れちゃつたんじゃないのー。」

「お前が原因つべつたケンカだらーがー！」

ハアハアと息を切らして、怒鳴り合つた俺と紅科。すると、紅科がハツとしたように俺の方を向く。

「あんたさあ、こつも学校ごどりサツて来てんのよ」

真つ直ぐ俺の田を見据える紅科。

「あ？ チヤリだけビー…………あ

「決まりね。乗せなさいよ」

ヒーリック「コ微笑んだ。

まったく…。

この笑顔を“天使”だとほざくヤツはどいつもこいつだよ。  
俺には悪魔にしか見えないがね。

## 第5話 黒い会長と仲直り（後書き）

なんだかんだで第5話です。

ここまで読んでくださってありがとうございます（――）

## 第6話 黒ご令嬢と恋の匂の匂（前書き）

遅れてしまつて申し訳ない。——

後半はマジシリアスです。

中篇予定なので、展開早いんですけど、我慢してくだけ——

## 第6話 黒い会長と初恋の日の面影

「ちょっとー。」

すぐ後ろで紅糸が怒鳴っている。

「もうちょっと丁寧な運転出来ない訳！？　あたしがか弱いの知つてんでしょうー？」

「うるせーーー！　元はと言えばお前が自分の電話番号知らねーのがわりいんだりー！　つていうかお前、自分がか弱いとか思つてんの！？　それは俗に言つ、『勘違い』ってヤツだ！」

「うーーー！　うるさこわねーー！　電話なんて普段しないんだから当たり前でしょー！」

「いや当たり前じゃねーよーー！　お前、相当イタイわー！」

今、俺たちは駅前行くための近道を通過している。  
だがこれが、とんでもなく道が悪く場所であった。  
もの凄く急な坂道を飛ばして走っているため、会話は大声でなければ通じない。

……とはいえ、俺、ここ通つたことないんだよね。  
テへ。

……あ、気持ち悪い？　分かつた、やめるね（涙目）

まあ、紅科が尋常じやない方向音痴を遺憾なく発揮してくれたので、結局道に迷つてしまい、誰も通りたがらないこの歪な形をした近道に来た…というわけだ。

幾度お前のせいだと言つても、彼女の「力過ぎるプライドはそれを認めたくないらしい。ホント、何から今まで困った女である。

自転車に乗るとか言つたときのこいつは超可愛かったの。

+++++

「なーにやつてんだよ！ 早く乗れって！」

俺は、自分の自転車に跨がり、紅科に向かってぼやいている。最近はパシリとして扱われることが少なくなつたため、金魚のファン的な頻度で“パシリ”の後ろに引っ付いてきた“嫌がらせ行為”も極端に減り、俺の自転車の鍵は放課後になつてもまだ生きていた。その自転車の鍵を指に引っかけ、華麗にクルクルと回す。俺つてちよつとカッキー！

「ちよ、ちよと待ちなさいよ……」

なぜかモジモジして、目線を逸らす。  
わざわざかずつとこの調子で、自転車に乗ることを渋つている。  
……自分が言い出したくせに。

「もういーから早く乗れって！」

とつとつ痺れを切らし、紅科の手を取り半ば強引に俺の後ろに導いた。

そして、ストンとつ眞面目に荷台のところに反まつた紅科は、今まで渋っていたのはウソかと嘆へり、「……」

「こつた！ ジリヒて超痛い……」

今度はギヤー、ギヤー喚き始めた。

そして、体を大きさに揺さぶり、自転車をガタガタ言わす。

「ひめむかこー ちやんと掴まれー！」

ジタバタする紅科の手を掴み、俺の腰へ回した。すると、

「ぬおつー！」

奇声が発せられた。

「何なんだよ！ それと、もつと女らしい声出せよー。」

「だつてだつて……」

また急にモジモジし出す。  
柄に合わない……。

見ているこつちの身にも若干危害が及ぶわ、コレ。

そう察知した俺は早急に次を促した。

「早くしろつて」

一瞬の間。

「は…、恥ずかしい……」

そう言つと、俯き、黙つてしまつた。

ちよこ、今の反則でしょ。

俺の頬、尋常じゃなく熱いんですナビ。

“頬が熱く熱を帯びている”……とかそういう生温い表現じゃねーつてば！

とにかく、何か喋らねば！

赤い顔を隠すようにして、口元を手で押さえて語ると、少し声がくぐもつっていた。

「……、お前に会わせるから。だから、早く乗つて

「う、うん……」

いや付き合つたてのカップルか！…………

なんでこんな

“甘酸っぱい青春を謳歌”

みてーなことしてんだ俺！ 相手は紅科だぞー？ よりこもよつてこの「コリラ！」

紅科は、そろそろと歩き出し、ゆっくりと荷台に乗つた。

そして、遠慮がちに腕を腰に回してくる。

ちゃんと乗つてこることを確認してから徐にペダルを漕ぎ出す。

俺の音か、紅科の音か分からぬ。

この鼓動は…。

きっと、2人とも緊張してる。

紅科は、思ったよりも軽くて、

俺の腰に遠慮がちに絡められた腕は、吃驚するくらいに細かつた。

近くにいることを、痛いほど認識させられる。

いつもは、近くにいるのに遠く感じる彼女だけ、少しだけ…、近づいた気がした。

柔らかい彼女の髪の毛がなびくたびに、何に対しても分からないうが、僅かな優越感が生まれたのは俺の秘密。

自転車に2人乗りして、強く生まれた感情があつた。

あれは約4年前の、春。

優しくて、今にも壊れてしまいそうな笑顔が印象的だった。

……「んなに彼女に近いと思つた人間はいない。

この、儂げに細くて華奢なひとを、ずっと探していた。彼女が突然いなくなつた日から、ずっと追い求めていた。

……中学の頃、見失わないよう必死で抱きしめていた、俺の幼く淡い初恋。

毎日羽織つていたカーディガンの綻びを。

振り返るたびに甘く誘うあの薰りを。

その瞳にいつでも宿っていた翳りを。

彼女の面影の全てを…。

俺は忘れることが出来なかつた、ただの一日も。

そして、紅糸を自転車に乗せたこの日から。

俺は彼女を意識せざるを得なくなる。

+++++

すっかり、日も落ちていた時間に出てきたから、間に合ひつかどうかは微妙だつた。

…でも、俺の脚力なら大丈夫だつて思つてたんだ。

いや、絶対に大丈夫だつた。

「だけどお前の方向音痴のせいでの俺の計画がバーだよーー！」

「あたしは方向音痴じゃない！ バカじゃないのーー！」

8時閉店のこの店は、つい10分前に閉じられていた。  
もうダメだ……、俺、ダメだもう……。

心の中で弱音を吐いていたつもりだったのだが、どうやら外にまで漏れていたらしい。

「さう？ 全くヘタレね！ 帰りは私が送るわ、後ろの荷台に乗つて！」

そういうこいつ、スポーツも出来んじやん。

全部任せときや良かつた。

女に頼るなんて情けねーけど、疲れたからじょーがない、うん。

「マジ? んじゃ任せたわー、ヨロシク」

「ハーア」

何故だか上機嫌になつた様子の紅科。

俺は荷台に乗つて、紅科の背中に縋りついてしまった。

「は、悠暉! ? ちよつと、何してゐのよ! ?

紅科の声が聞こえたけど、そんなのお構いなし。

俺は深い眠りへと誘われた。

それから幾らくらいたつたのだろうか。

遠くで俺を呼ぶ声が聞こえる。

「悠暉ー! 起きてよ! あたし、道分からなくて…。助けてよー」

なにやら途方に暮れている様子。  
誰、だろ? ……。

細いシルエット。  
まさか……、

「い、の……り……?」

無意識の内に紡がれた言葉。

4年前の清らかな思い出……。

阿澄 あすみ  
祈 いのり

これが、彼女の名前。

……俺の初恋の人。

相手の姿を確認する前に俺は再び闇の中へ葬られた。

一瞬開けた意識の中で、紅糸が視界の隅に映った。

だけど、その端正な顔に浮かんだ表情に、俺は気づかなかつたんだ。

ただ、祈の姿が少しでも垣間見えたことが、死ぬほど嬉しかつたら……。

まだ、俺の中の彼女の影は、拭えない。

## 第6話 黒い会長と初恋の日の面影（後書き）

ホントに急ですみませんm(—\_—)m

3回までに終わらせたいなと思ってるので、ペースあげていきます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0541y/>

黒い会長とモヤシな俺の498日

2011年12月1日23時45分発行